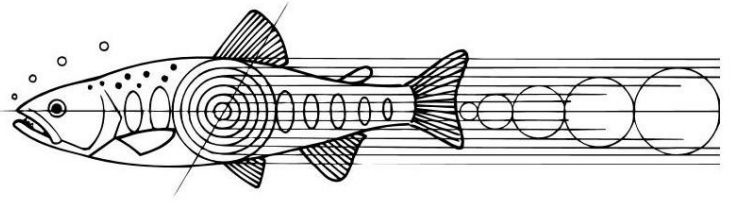


# news

長良川市民学習会ニュース



関市上之保

## 特集 2018年7月豪雨水害



岐阜市・長良橋



長良川鵜飼い観覧船乗り場



四日市市・吉崎海岸

# No.27

2018年8月16日

巻頭言 . . . . . 2  
活動報告 . . . . . 3  
平成30年7月豪雨の教訓 . . . 4  
2018西日本豪雨と長良川 . . . 6

5月31日岐阜県交渉報告 . . . . . 11  
あゆパークと鮎釣り . . . . . 13  
事務局から . . . . . 15  
参加団体紹介・ご参加ください! . . . 16

長良川を放射能で汚してはならない! 私たちは、原発の再稼働に反対します。

## 7月豪雨の被災者の方々には、心よりお見舞いを申し上げます。

長良川市民学習会代表 粕谷志郎

近年の水害は、従来のものとは異なるパターンとなっているようです。昔はあまり耳にしなかった線状降水帯があちこちで大きな被害を発生させています。長良川でも、墨俣の水位は、1976年安八水害に次ぐ高さとなりましたが、水害は遙か上流の津保川で発生しました。気象庁が「経験したことのない」「ただちに命を守る行動」などの度重なる警告を発していたことも耳に残りました。

先日、愛媛県西予市の野村ダムの緊急放流によって引き起こされた水害の説明会が行われたとの報道を目にしました。同ダムでは満水の恐れがある時には毎秒300トンに放水量を増やす規則ですが、7月7日には6倍の毎秒1,790トン流したそうです。ダム決壊を恐れた管理者のあわてぶりが伝わってくるようです。結果は、テレビ放映されたように、あっという間に冠水した市街地の水位が上昇しました。野村地区650戸が浸水し、5人が亡くなりました。国土交通省は避けられなかったと説明しました。ダムが無くて同じ量の水が出る事は確かですが、少なくともダム放流後の急激な被害の拡大はなかったはずで、ダムが治水に役に立たなかったこと、避難の機会を奪い被害を拡大したことをまざまざと見せつけました。治水におけるハードウェアであるダム、堤防は必ず限界を超える、最近の洪水のパターンはそれを見せつけているようです。線状降水帯が居座ったら時間の問題となります。破堤を前提とした対応、ハードもソフトも含めて構築してゆく必要があることを痛感します。

引き続き台風12号では、7月28日、小田原市の国道135号で高波に呑まれた救急車が大破し、パトカーも水没したと報道されました。この時期は一年でも潮位の高い大潮にあたり、被災した時刻は午後6時頃の満潮に近い時間帯、さらに、台風通過に伴う高潮と、条件が重なり、想定外の高波の発生となったようです。

長崎県・川棚川の支流石木川のダム計画に反対し続けた13世帯のドキュメンタリー映画の試写会を予定しています。8月31日（金）です。詳細は同封のチラシをご覧ください。ダムの目的は佐世保市の水の確保と洪水の防止だそうです。水は足りています。洪水に役に立たないのがダムです。

9月23日には「長良川の河口”桑名”でお話しを聞く会」を予定しています。河口堰によるシジミの被害と、高潮、高波、津波が河口堰に押し寄せたらどうなるのか、怖い想定をあえて展開します。

10月6日（土）「徳山ダム導水路ツアー」を予定しています（詳細P16）。前原当時国交大臣が凍結宣言を発して9年になります。未だに徳山ダムの水を長良川に流す工事は一步も進んでいません。解凍せずにゴミ箱へ！

皆様、多くの方々のご参加をお待ちしています。

### 9/23 市民学習会のお知らせ

#### 長良川の河口桑名でお話を聞く会

西日本豪雨では、ダムの存在と放流操作が大きな問題となりました。河口堰閉鎖から23年目、伊勢湾台風から59年目になります。日本有数のシジミ産地であった赤須賀の苦境と伊勢湾台風で甚大な被害を受けた長島町の様子を伺います。東南海地震の心配がある現在、河口堰開門の意義を学びたいと思います。ぜひご参加ください。

- 日時 9月23日（日）集合9:30 赤須賀漁港
- 会場 はまぐりプラザ会議室 \*参加費500円  
桑名市赤須賀86-21 電話0594-22-6010

9:30～ 赤須賀漁港でシジミ選別作業を見学  
10:00～ シジミ・ハマグリを競り市見学  
10:30～ はまぐりプラザ会議室  
(お話) 伊藤研司さん(しじみプロジェクト・桑名市議)  
加藤良雄さん(河口堰裁判で高潮の証人)

昼食(各自持参)後、伊勢大橋を渡り長島の現地で加藤さん宅の防災施設などを見学します。公共交通を利用される方はご連絡ください。

当日参加も歓迎ですが、資料の準備がありますので事前に申し込みをいただくとありがたいです。



## 活動報告

長良川市民学習会事務局長 武藤 仁

前号発行2月以降の活動報告をします。

2月10日(土)よみがえれ長良川実行委員会など5市民団体で主催する伊勢湾流域圏の再生シンポジウムⅢが豊橋市民センターで開催されました。沖縄のアキノ隊員(宮城秋乃さん)を招き基調講演「生物多様性と開発」を受けた後、三河地域の環境を守る4件の報告を聞きました。翌日は岐阜市で有志による主催でアキノ隊員が語る「生きものそして沖縄」が開催され約100名の市民が参加しました。



伊勢湾流域圏の再生シンポジウムⅢ

5月13日(日)ぎふメディアコスモスで開催された「みんなの森に大集合」にブース「よみがえれ長良川!」を出展しクイズ「長良川」を企画しました。多くの市民が行列を作るほど大盛況で4つの質問に約250名の市民が答えてくれました。



クイズ「長良川」

その中で「問2.長良川の鮎はどこで産卵するの?」に対しては①郡上～関一183人 ②岐阜～羽島一34人 ③伊勢湾一19人の回答がありましたが、正解は②です。岐阜市民には親しみのある鮎ですが、なかなか本当のことは知られていないようです。本ニュースp13「あゆパークと鮎釣り」をご覧ください、長良川の鮎の実態を考えてください。

5月27日(日)湿地のグリーンウェイブ2018と連携し、恒例の長良川下流域環境観察会を開催しました。



長良川下流域環境観察会

15名の参加で午前は水辺の比較観察、午後は船に乗り川の調査をしました。カニ採取では揖斐川で81、長良川でわずか1匹と驚くべき観察結果となりました。観察会の内容はユーチューブ

<https://www.youtube.com/watch?v=tOKNNh-9IYs&feature=youtu.be>で配信しました。是非ご覧ください

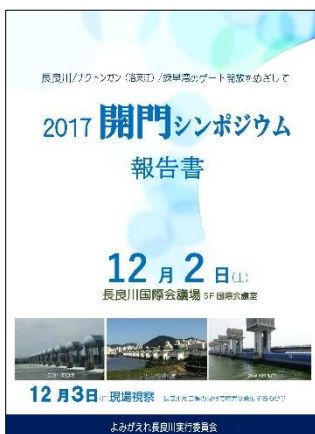
5月31日(木)よみがえれ長良川実行委員会は、岐阜県に対し12名の参加で①徳山ダム導水路事業の中止②長良川河口堰の開門調査③内ヶ谷ダム建設の中止など「長良川の環境改善を求める」要請を行いました。



岐阜県交渉

た。県側は河川課長ら5名が対応。実行委員会は、河口堰のヘドロや関連する環境悪化を示す資料を持参し訴えましたが、県側は、理解を示そうとしませんでした。詳しくは本ニュースp11の「5月31日岐阜県交渉」をご覧ください。

6月30日、2017開門シンポジウム報告書を発行しました。これは昨年12月2日に長良川国際会議場で開催したシンポジウムの報告書で、ナクトンガン河口堰、諫早排水門開門をめぐる現場の状況がよく分かります。また、12月3日に開催した現場視察の内容も収録されています。シンポ参加者にはできる限りお届けいたしました。まだ在庫があります。入手希望者にも無料配布していますので希望される方は、ご連絡ください。



# 平成 30 年 7 月豪雨の教訓

元京都大学防災研究所長 今本博健

「平成 30 年 7 月豪雨」は西日本各地に甚大な被害をもたらした。とくに驚かされたのが犠牲者の多さである。土砂災害によるものが半数以上であるが、洪水氾濫による犠牲の多かったのが特徴的である。ここでは、浸水により 51 人もの死者が出た岡山県倉敷市真備町とダムの緊急放流により 9 人が犠牲となった愛媛県肱川の状況を紹介します。両者に共通するキーワードは「急激な水位上昇」である。

## ■岡山県倉敷市真備町の浸水被害

真備町を流れる小田川は、広島県の神石高原を水源とし、岡山県の高梁川に合流する。流路延長は 72.9km、流域面積は 492km<sup>2</sup>である。高梁川との合流点上流の地形はなだらかな窪地となっており、往時は小田川を流入させるとともに、高梁川の遊水地だったのではないだろうか。堤防により高梁川と分離し、小田川の河道を南部の山沿いに固定したものの、窪地の大部分は小田川河床より低いまま取り残されたのではないだろうか。国交省が発表している「重ねるハザードマップ」によると、この地区は計画規模洪水が氾濫してもきわめて広範囲が 5m 以上の浸水深となっているが、地区の生い立ちからすれば領ける。今回の豪雨では 12km<sup>2</sup>が浸水し、ハザードマップが示すとおり、多くの住家の 1 階部分が水没した。

問題なのは、1970 年ころまで農地だった所が、水島工業地帯の発展とともに、河川改修を待つことなく、宅地開発されたことである。5m も水没するかもしれない所なのに、ごく一部は盛土していたが、民家だけでなく、学校も、病院も何の浸水対策もしていない。浸水に対して全く無防備だったのである。

それにしても死者の数が多すぎる。直接的な原因は浸水位の急上昇であるが、それをもたらしたのが破堤である。真備町地区の破堤箇所は、毎日新聞に載せられた図に示すように、国管理の小田川で左岸 2 か所、県管理の末政川で右岸 2 か所および左岸 1 か所、高馬川で右岸 1 か所および左岸 1 か所、真谷川で右岸 1 か所、合計 8 か所である。



破堤の原因について多くのマスコミが専門家の説明として

報じたのは「バックウォーター説」である。すなわち、高梁川の水位が小田川合流点下流の狭窄部により高められ、その影響で小田川の水位が高められ、それが小田川に合流する支川の水位を高め、それぞれで越水が発生したために、土でできた堤防が破堤したというのである。

破堤地点で越水があったのは確かなようであり、越水すれば破堤する可能性が大きくなるのも確かである。しかし、越水箇所がすべて破堤したわけではない。越水プラス「何か」があって破堤したのであり、堤防自体に問題があったか、流れが作用したかを検討しなければならない。国交省は委員会を設置して原因を究明するそうなので、その結論を待ちたい。

破堤現場を見て、疑問に思ったのは小田川に流入する支川の末政川 0K700 地点で向かい合う両岸が破堤していることだった。対岸が破堤すれば、此方岸は免れるのが普通である。この疑問は住民の北原一伸氏が 7 日 5 時ころに撮影した映像を見て解消した。上流で溢れた氾濫水が堤内地を流れて末政川右岸に到達し、それが末政川を乗り越えて左岸から再び氾濫している。河川流の上を氾濫流が横断しているのである。この横断流が破

堤を招いたと思われる。きわめて珍しい例で、筆者は初めて目にした。

### ■肘川における野村ダムおよび鹿野川ダムの緊急放流

肘川には鹿野川ダム(1958年竣工)と野村ダム(1981年竣工)が設置されており、鹿野川ダムはトンネル洪水吐の増設およびクレストゲートの改造を行う再開発が2018年に完了している。ほかに山鳥坂ダムが計画中である。

2004年5月に策定された肱川水系河川整備計画では、ダムサイトでの洪水調節は次のようになっている。すなわち、戦後最大の1945年9月枕崎台風洪水を対象として、野村ダムでは $1300\text{m}^3/\text{s} \rightarrow 1000\text{m}^3/\text{s}$ に $300\text{m}^3/\text{s}$ を調節し、鹿野川ダムでは $2350\text{m}^3/\text{s} \rightarrow 1550\text{m}^3/\text{s}$ に $800\text{m}^3/\text{s}$ を調節するとしている。

今回の豪雨では、基本方針が想定する1/100規模を超える降雨量があったため、野村ダムでは $1942\text{m}^3/\text{s} \rightarrow 1792\text{m}^3/\text{s}$ と $150\text{m}^3/\text{s}$ 、鹿野川ダムでは $3800\text{m}^3/\text{s} \rightarrow 3742\text{m}^3/\text{s}$ と $58\text{m}^3/\text{s}$ しか調節できなかった。計画を超える規模の降雨に対してダムは役に立たないのである。

さらに住民にとって迷惑だったのが「ただし書き操作」すなわち「異常洪水時防災操作」と称する緊急放流である。それぞれのダムで設定した洪水時最高水位を超えるとダムが危険になるという理由で、放流量を流入量に一致させようとする。

野村ダムでは7日06:20に緊急放流を開始し、わずか20分の間に $439\text{m}^3/\text{s} \rightarrow 1409\text{m}^3/\text{s}$ へと $970\text{m}^3/\text{s}$ も増やしており、鹿野川ダムでも7日07:35に緊急放流を開始し、40分ほどの間に $2500\text{m}^3/\text{s}$ も増やしている。この放流により、野村ダム下流の西予市野村地区では5人が死亡し、鹿野川ダム下流の大洲市では4人が死亡している。人の命を守るべきダムが人の命を奪ったのである。

7月19日に行われた第1回野村ダム・鹿野川ダムの操作に関わる情報提供等に関する検証等の場の資料によれば、野村ダムでは実際の最高水位は設定された洪水時最高水位を0.63m超え、鹿野川ダムでも0.63m超えている。設定値は大した意味を持っていない。

ダム天端を越水した場合はどうなるのか。ダムは壊れるかもしれないといわれているが、壊れれば下流に壊滅的被害をもたらすので大事(おおごと)である。想定をはるかに超える降雨があれば、すべてのゲートを全開しても越水する可能性がある。したがって、越水すれば壊れるというのが本当であれば、ダムはきわめて危険物であり、直ちに撤去すべきである。

私の知る数少ない例である。和歌山県の日置川に設置された関西電力の殿山ダムは、1958年の洪水で越水したが、ドーム・アーチ型コンクリートダムの本体は損傷を受けていない。福島県の阿賀野川水系只見川に設置された東北電力の本名ダムは2011年の新潟福島豪雨の洪水で越水したが、周辺の附属施設は損傷したが、重力式コンクリートダム本体は無傷であった。

こうした例から類推すれば、ダムは越水にも耐えられるのではないか。もし、耐えられるのであれば、緊急放流のやり方を抜本的に変えることも可能である。筆者の試算によれば、殿山ダムのすべてのゲートを全開にして自然放流にすれば、ダム湖の貯留効果により発電ダムで常用される「遅れ操作」より洪水調節量は大きく、最高水位も低下できる。

ダムは、超過洪水には所定の効果を発揮できず、頼りにはならないものの、持てる能力を最大限に発揮させるようにすることはダム事業者の責務である。河川管理者は、河道に配分された流量を安全かつ確実に流せるよう、流下能力の増大と堤防補強に全力を傾けるべきである。河道整備の遅れを理由に、ダムの操作対象を大洪水から中小洪水に変更したのは本末転倒である。

# 2018 西日本豪雨と長良川

長良川市民学習会事務局

7月6日（金）から8日（日）にかけて西日本は記録的な豪雨に襲われました。数十年に一度の重大な災害が予想される場合に出す「大雨特別警報」を気象庁は福岡、佐賀、長崎、広島、岡山、鳥取、京都、兵庫、岐阜、愛媛、高知の11府県で発表、9日にはこの大雨の名称を「平成30年7月豪雨」と決め、発表

しました。この豪雨による死者は200名を大幅に超える大災害となり、広い範囲にわたる被災地の復旧作業は記録的な猛暑の中で現在も続いています。とりわけ中国・四国地方の被害は甚大で、「ダム」の放流問題がクローズアップされているのが特徴です。

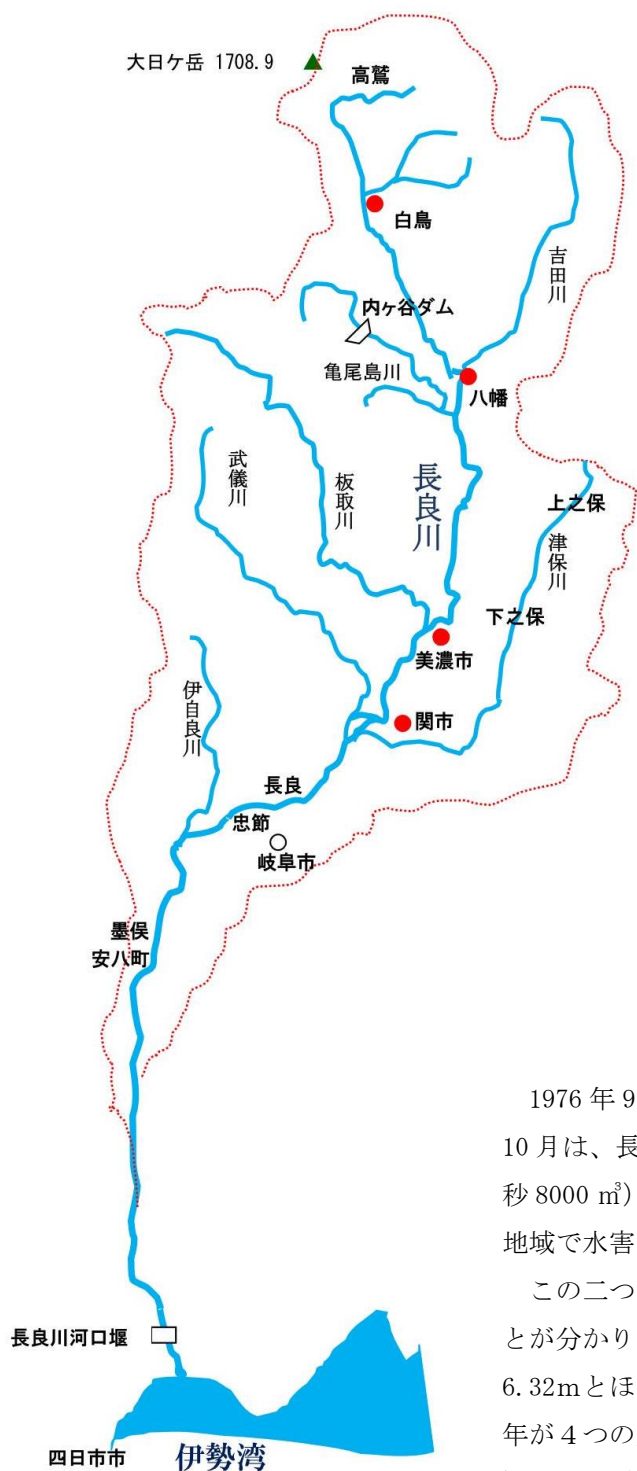
中国・四国地方のすさまじい災害現場が連日マスコミ報道される中、私たちの長良川流域でも記録的な洪水や水害が発生していました。本レポートはそこに焦点を当てたものです。

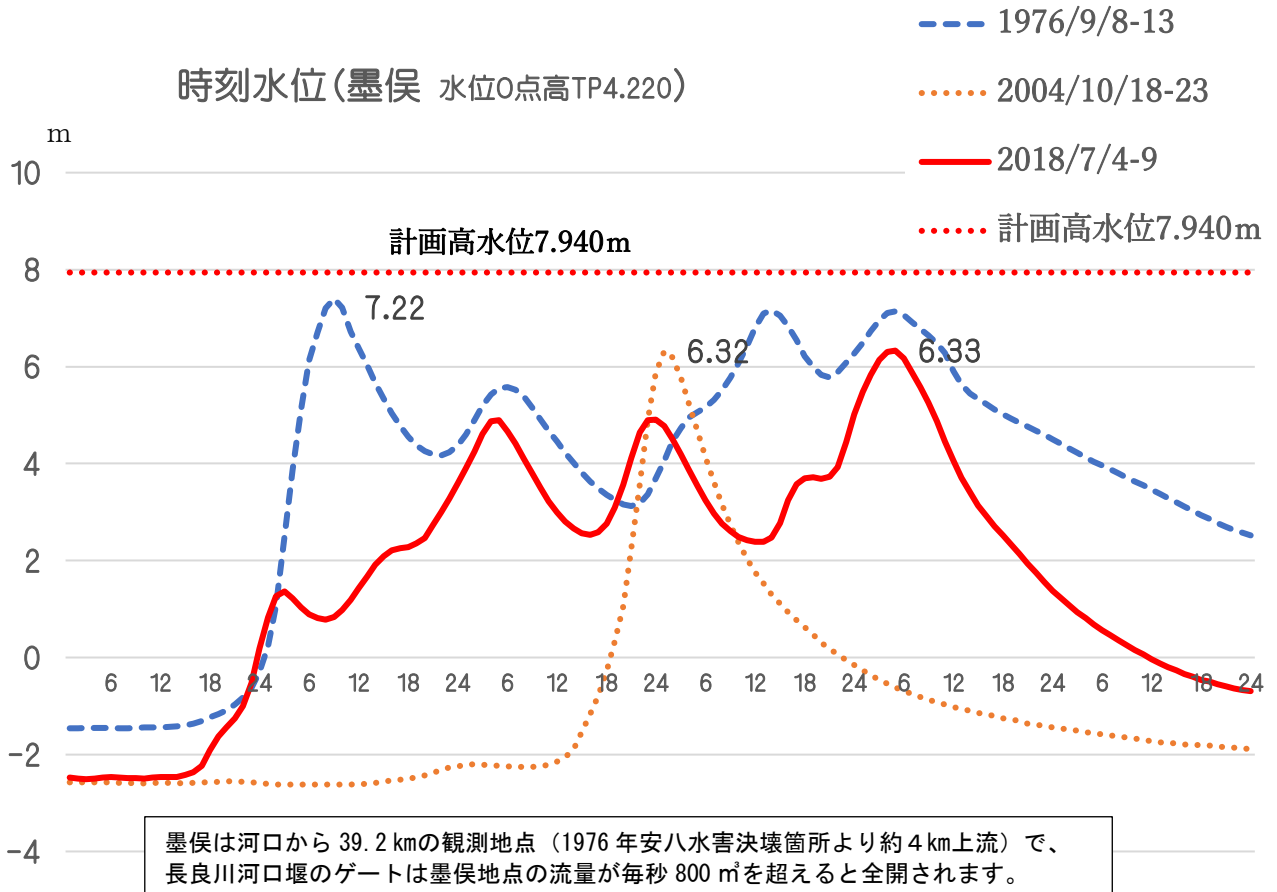
## 2018年長良川洪水はどんな洪水だったのか

岐阜地方気象台の分析・発表では長良川流域では中濃・飛騨地域に「線状降水帯」が発生し、郡上市高鷲町では7月9日午前零時までの5日間で総降水量が1058mm、平年の年間降水量の1/3に匹敵する記録。美濃市では8日午前1時ごろにかけて1時間の降水量83mm、1990年代の統計開始以来最高値が観測されました（7/12中日新聞）。今回の豪雨は長良川にどのような洪水を発生させたか、国交省の水文データベースから、墨俣（すのまた）地点の時刻水位データを拾いグラフ化（次ページ）し、過去の大洪水と比較し考えました。

1976年9月8～13日は「昭和41年安八水害」の洪水。2004年10月は、長良川治水計画上想定している最大の流量（墨俣流量毎秒8000m<sup>3</sup>）に匹敵する観測史上最大の出水で、郡上八幡・美濃市地域で水害を引き起こした洪水です。

この二つの大洪水と比べても今回の洪水が大きいものだということが分かります。最大級流量を記録した2004年洪水の最高水位6.32mとほぼ同じ6.33mを記録しました。洪水推移を見ると1976年が4つの大きな山を観測しているのに対し、今回は3つの山を観測し1976年洪水に似た大きな洪水でした。



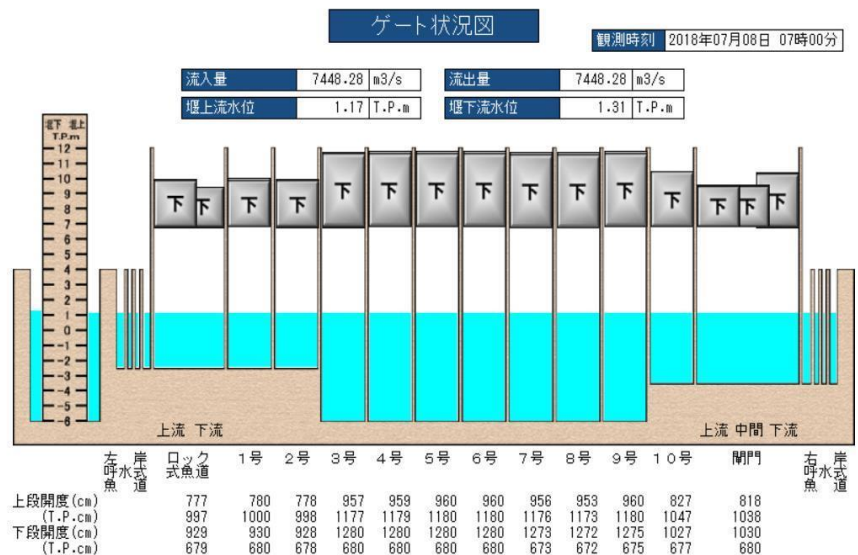


ちなみに 1976 年洪水における安八堤防決壊は 4 つ目の山の 9 月 12 日午前 10 時 28 分に起こりました。グラフからも分かるように計画高水位を超える洪水ではありませんでした。堤防決壊は、堤体の欠陥と堤防立地の問題から起こったもので、水害裁判でも明らかになりました。「水位を下げるために浚渫が必要→潮止めの河口堰が必要」という国・事業者の主張は的外れです。今回の大きな洪水でも水害は上流では発生したものの下流では全く被害は出ていません。

### 長良川河口堰では

河口堰の開門状況について河口堰管理事務所ホームページのリアルタイム「ゲート状況図」を注視していましたが、7月8日午前7:00の流入量が7448.28 m<sup>3</sup>/sと発表された(右図)ときには、すごい流量だなと思いました。

なお、7月11日の水資源機構長良川河口堰管理所の正式発表は以下の通りでした。



流域平均累計雨量 : 639 mm (7月3日 22時から8日 14時)

堰最大流入量 : 毎秒約 7,400 立方メートル (8日 6時 50分) ※管理開始以降、2 番目となる堰最大流入量でした。

・全開操作開始時刻 : 5日 2時 31分 ・全開操作終了時刻 : 10日 17時 57分 ・全開操作継続時間 : 135時間 26分

なお、今回の全開操作は、平成7年7月の河口堰運用開始以降 153 回目となります。また、運用開始以降最大の出水は、平成16年10月台風23号による洪水であり忠節地点毎秒 7,667 立方メートルの流量を観測しています(国土交通省水文学質データベースより)。

## 関市上之保では

長良川流域の水害については「津保川で1名死亡」の情報以外は、中国四国地方の重大な情報に隠れてあまり伝わってきませんでした。そこで津保川筋の状況を掴もうと7月13日に関市上之保を視察しました。

津保川沿いの県道を北上。富加町を越えるあたりから県道は埃っぽくなり、泥水を被った跡であることがわかりました。沿道の家屋・商店では、まだ浸水後の後片付け・掃除が続いていました。津保川は澄みきっていましたが、河畔の林・竹やぶは、洪水で上流の化学工場から流出した数十トンの夥しいポリ樹脂が絡み、まるで七夕祭りのような不気味な光景が続きました。



県道を北上すると川べりの路肩が崩壊する現場が現れ始め、片側交互通行規制箇所が増えていきました。「この先、行き止まり」の安全柵で閉鎖はされていましたが、地元住民のために一車線分は空けてありました。この「関所」を数か所通過してさらに北上しましたが、ついに上之保「小樽」地点で全面通行止め。車を止め歩いてさらに県道を北上すると道路が完全に壊れていました。コンクリートの堰堤も崩壊し、今回の洪水の力に驚かされました。

調査中の地元建設業者に出会い話を聞くと、この上流の家屋ではもっと大きい被害があるとのことでした。



右は「小樽」バス停そばの家屋。1階はまだ家財を搬入できる状況ではなさそうでした。

小樽地区を折り返し下流に向かうと、他の災害地と同じように、ここでも橋に流木が行き止まり、まわりの護岸や道路の崩壊を引き起こしていました。



左は橋の上流側に添架された水道管。激流と流木に大きなダメージを受けているが、耐えて集落の命の水を守れたのだろうか。



右は上之保中学校。運動場は、持ち込まれた廃棄物と土砂でいっぱいでした。校内放送は、作業員やボランティアのみなさんに向かって「無料で温泉に入れます。ぜひ利用してください」と呼びかけていました。



県道を南下し、上之保小学校の少し上流地点で、浸水した家屋の畳を上げたまま、扇風機をフル回転して床下を乾燥している方に会いました。この家屋は表が県道に面し裏には津保川が流れています。写真撮影の許可も得て、奥さんに話を聞くと下の写真の白線の示すあたりまで浸水し、必死で仏壇を移動させたそうです。写真の通り床の間には茶色い水面の痕跡（白線で図示）が残っていました。洪水の真夜中、津保川の越水流の中でこの家が孤島ようになった光景を想像するだけでもゾッとしました。と同時にこの地域では犠牲者が出なかったことに驚きました。犠牲者が出たのは別の集落だそうです。



### 関市下之保では

\*上之保から下流に位置する下之保の状況について、当会事務局の友人を通して得たメールを、本人の了解を得て載せるものです。

豪雨で不安な夜中、夫は2時頃呼び出しがあり、避難所で消防団の仕事をしていたところ、瞬く間に通りが水に浸かってしまったそうです。

夫が出かけてすぐサイレンで注意を呼び掛ける放送がありました。「災害」というものを身近に感じました。我が家は比較的高台にあり被害はなかったのですが、川に近い畑のビニールハウスは壊れ、ゴミが流れ込みめちゃくちゃなことになってしまいました。住まいの被害ではないので、ボランティアセンターに連絡することは憚られたのですが、お願いすると、酷暑の中、連休の2日とも20人以上の方が県内外から来てくださり、トラックに10杯以上ものゴミを片付けてくださいました。作物を作っている時期じゃないので保険は効かず、途方にくれていた我が家にとっては、この1週間ずっと重くのし掛かっていた困りごとでしたので、本当に助かりました。しかし高齢の両親にはハウスイチゴの栽培再開は残念ですが、無理だと思っています。

(下之保 Fさん)

### 岐阜市長良では

長良地点では水位が19.88mになると堤防の高さ23.79mを確保するために陸閘(りっこう)が閉鎖されます。幹線道路長良橋線は閉鎖され次ページ地図の太線で囲った堤外地の住宅と旅館街は浸水を「受け入れる」こととなります。今回14年ぶりに閉鎖されましたが、洪水水位は20.35m(午前3時)で川縁の旅館の一階駐車場レベルの浸水に終わ



長良川の陸閘、14年ぶり完全閉鎖  
朝日新聞デジタル 7/8(日) 3:28 配信

ったようで、住宅には影響はありませんでした。鵜飼い観覧船は、この洪水で2隻転覆などの被害が出ました。

1959年の伊勢湾台風では、水位が21.14mとなり長良地域が広範囲に浸水しました。陸閘は水害の拡大を防ぐ策として1962年に設置されました。その後左岸が2001年に、右岸が2008年に全面改築され今日に至っています。

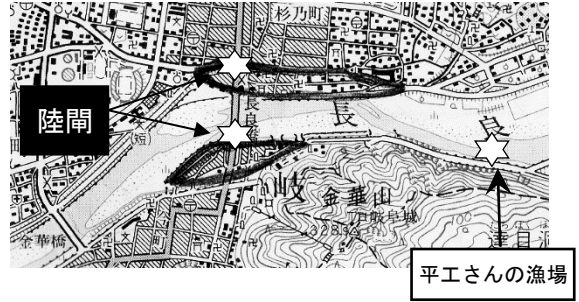
洪水で川の形も変わりました。

右上の写真は一昨年「結の舟」に乗って遊ぶ長良川市民学習会の仲間たちです。グランドホテル上流の鵜飼観覧スタートの「お山下」というあたりです。上流側から撮っています。平工顕太郎さんの案内で中州に上がろうとしているところです。左側の川筋が平工さんの漁場。右側にも大きな川筋が見えますね。

ところが洪水後、左岸道路上からこのあたりを見下ろすと川の形は全く違いました。右下写真。中州がなくなっています。滞筋は一本に！2年前、中州に上がろうとした地点は、右下写真の★地点です。

平工さんに話を聞くと、中州がなくなり船外機をつけた鵜舟は、出漁地点の「まわし場」となる上流の鵜飼大橋あたりにたどり着けず、現在、「お山下」がまわし場となっているそうです。

網を使う平工さんの漁には、影響は出てないが、鵜飼漁にとっては痛手のようです。ここから約500m上流に船着き場を持つ平工さんは、今回の出水中、4日間一度も帰宅することなく船を見守り続けたそうです。



現在、夏休みシーズンに入り、毎日のように漁船を開放して長良川を案内されているとの元気な連絡がありました。



### 伊勢湾・四日市では

四日市から津市にかけて最もウミガメの産卵が期待できる7月中旬に大量のゴミが漂着しました。8月5日(日)には、四日市の吉崎海岸にて緊急清掃を朝の8時から行いました。今回は近隣のコンビニエント企業31社にも参加のお願いを郵送しました。また、鳥羽市や、奈佐の浜には被害や漂着ゴミは全く無くて、漂着ゴミの漁業被害は鳥羽については皆無です。

(22世紀奈佐の浜プロジェクト・事務局長 森一知)



7月9日 四日市・吉崎海岸に打ち上げられた大量のゴミ

## 5月31日岐阜県交渉報告

毎年、岐阜県知事あてに「長良川環境改善に関する要望書」を提出し、それに関して県土整備部河川課長、職員と話し合いを持ってきた。今回は、環境観察会の写真と採取した川底の土を持参し、以下の要望書を提出し話し合いをした。「よみがえれ長良川」からは12名が参加。

2008年以降、交渉した河川課長は4名。すべて国土交通省からの出向で任期は1年～4年、平均2年で交代。毎回、回答は国交省の方針とほぼ同じ。97年の河川法改正で盛り込まれた住民参加、環境保全の精神を生かして、環境悪化を心配している県民、市民の声に耳を傾け、大切な長良川をよくするために共に考え行動してほしい。



長良川河口堰によるヘドロや導水路からの冷水の問題を訴える市民団体代表ら―県庁で

長良川河口堰の開門調査を要望  
県に市民団体  
市民団体「よみがえれ長良川実行委員会」は31日、導水路計画中止や長良川河口堰（三重県桑名市）の開門調査の実現などを求める要望書を県に提出した。

同実行委員会は、揖斐川上流の徳山ダム（揖斐川町）の水を長良川と木曾川に流す導水路計画などに反対する「長良川市民学習会」など別の市民団体からなる。同会は河口堰周辺に積もったヘドロを  
志部・岐阜大名誉教授は「徳山ダムからの水は冷たく、生態系を破壊する」として、導水路事業の中止などを要請した。

対応した井上課長は、導水路事業は東濃地域の渇水被害に対して効果がある▽河口堰は弾力的なゲートの運用で水質が改善されている―など回答。井上課長は「県として、河川・地域を良くしていくためにもリスクに備えなければならぬ」と理解を求めた。

【柳田伸治】

2018. 6. 1 毎日新聞

**要望1 木曾川水系連絡導水路事業について長良川環境悪化の危惧を表明し、「事業の中止」を求めること。**

**本導水路事業にかかわる東濃地域の渇水対策論は取り下げること。**

**井上課長** 長良川への放流は、最近の気候変動による渇水リスクに備えるために必要な事業だと考えている。渇水時に水量が増えることで生物にとっての環境改善になる。流す水は、すぐに攪拌され混合するので心配はない。検証の結果、影響は限定的という評価を得ている。導水路事業は異常渇水時に統合運用する東濃・加茂地区の渇水に役に立つと考えている。

**市民側** 環境改善になるどころか悪化するのではと心配している。世界農業遺産に登録している清流長良川。宮内庁の御料場、御料鵜飼を行っている長良古津に、わざわざ、汚れた、水温の低いダムの水を流していいのか。渇水時には水量の半分近くがダムの水になる。水温が違えば層ができ水は混じりにくく、酸素が届かず川底がヘドロ化する恐れがある。平成6年の渇水時にこの近辺の鮎が死んだという報告はない。生物学者などの意見を中心に109項目の環境レポートを岐阜県も取りまとめたはず。その結果はどうなっているのか。導水路の上下分割案で、長良川へ4トン流すことになり環境悪化が危惧される。岐阜県は異常渇水時の河川環境改善として約30億円負担することになっている。利水分の負担金は払わないのに東濃地区の渇水対策（水道用水）になるという説明はおかしい。

**要望2 長良川河口堰の「開門調査」に向けた取り組みを行うこと。長良川河口堰調査検討委員会と県民調査団の運営は県民に開かれたものにする。**

**井上課長** 開門すると塩害の恐れがあり、農業へも悪影響のリスクがある。国土交通省、水資源機構と協力して、フラッシュ操作を増やす堰の弾力的運用をさらに進めて水質改善を図っていきたい。環境影響は想定内で推移していると考えている。堰下流の堆積したシルトは洪水で流されるのではないかと。

**市民側** 河口堰運用から23年。長良川の河口部の環境悪化は甚大。哀れな川になってしまっている。しかし当局からは環境影響は軽微と言われてきた。現地を見て、変化を感じてその変化を知ってほしい。フラッシュ操作など堰の弾力的運用を進めることに反対してはいない。ただ、それだけでは環境悪化を改善することは

きないことははっきりしている。生態系回復のためには川と海を繋ぐ汽水域の回復こそが必要。今年の大橋亮一さんのサツキマスの漁獲は僅か49匹。この深刻な状況をどうしたらいいのか、真剣に考えてほしい。堰下流のヘドロは2m以上堆積し、洪水でも流されない状態。今年の子たちの測定でも河床の酸化還元電位は、揖斐川227に対して長良川は-350。シジミなど生き物は生息できない。

開門すると濃い海水が30キロまでまっすぐ遡上するので塩害が起こるというシミュレーションは疑問。「塩害のリスクがない範囲で開門調査を」という愛知県の提案は岐阜県も受け入れることができるのではないかと。岐阜県からも開門調査をぜひ要望してほしい。堰閉鎖で常時水位が上がった状態で、堤防が圧迫されている。昨年の私達の現場視察でも、現に堤脚部の水路ブロック壁で波打っている箇所を確認。治水上とても心配だ。

岐阜県が独自の調査検討委員会を長年行っていることは評価しているが、傍聴者からも意見が言えるような、県民の意見が反映できるような開かれたものにしてほしい。県民調査団の参加者の中で公募の一般参加者は、昨年は67名中1人。参加者の半数以上が特定の学校の学生であることは異常だ。調査団の趣旨から疑問がある。若者の参加は悪くはないが、一般参加がしやすいよう開催日を土・日にするとか、広く分かりやすく公募してほしい。

**要望3 ダムによらない伝統的防災施設施策の充実をはかり、内ヶ谷ダム建設工事を中止すること。本事業の費用・便益を明らかにすること。**

**井上課長** 治水効果のある内ヶ谷ダム建設を見直すつもりはない。河口堰については、堰の管理をする関係機関と連携して努めていきたい。河川管理者としては、川をよくするとともに地域をよくすることが大切だと考えている。私個人としてはゴミ拾いに参加するなど地道な取り組みとともに、河川行政の責任者として今後も取り組んでいきたい。

要望3については、時間が足りなく十分に話し合うことはできなかった。今回の水害でもわかったように、ダムに依存した治水は危険である。堤防の整備、遊水地や輪中堤の再評価、森林管理、宅地開発のあり方、いざという時の避難方法など、地域住民と行政がともに考え、対策をたてていくことが大切ではないだろうか。

## 初めて参加して

小沢 祐子

自然の脅威の前に、人の営みは積木細工でしかない脆さを私たちは目の当りにした。治山治水と言うが、丁寧な山の管理に取り組んできただろうか。天然林を人工林に変え、手入れを怠って放置してはこなかったか。木曾川水系の上流には、中部経済圏の社交場としてゴルフ場が乱立している。7月の豪雨で氾濫した津保川沿いも、富野小学校を起点に半径3キロ以内に6ヵ所ものゴルフ場がある。緑のダムである森林が伐採され、山の保水力が著しく低下して、これまでも集中豪雨の度に鉄砲水が富野のあちこちで発生していた。

先ごろ、初めて県の河川課との交渉に参加した。担当者は現地を隈なく歩いているのであろうか。机上の論に終始している印象で、木曾川水系に生きる住民と後世に責任を負う河川行政の当事者としての気概が希薄に感じられるのは、残念である。急激な人口減少に向かう中で、従来の計画を見直すのは当然であり、これ以上、自然の深部にメスを入れてはならない。驕りを捨て、この惑星の摂理に聴いてほしいと願う。

## へぼ釣り師の独り言 「あゆパークと鮎釣り」

堀 敏弘

### 長良川あゆパークがオープン

今年の鮎の解禁は6月3日の日曜日だった。これに合わせるように6月2日に郡上市白鳥町長滝の長良川沿いに道の駅・白山文化の里長滝に併設されるかたちで清流長良川あゆパークがオープンした。

6月8日高鷺に鮎釣りに行く途中に通りにかかったので寄ってみた。この施設は1990年に調印された長良川河口堰建設に伴う漁業補償によって5億3千万円をかけて整備された関連施設で郡上市が運営する。

「触れて、遊んで、食べて楽しもう」をキャッチフレーズに世界農業遺産「清流長良川の鮎」をまるごと体験！！と謳っている。

里川あゆハウスという管理棟があり、ここには研修室やレストランなどがある。他にはあじわい広場というバーベキュー棟、プール状になった魚釣り広場、人工河川の魚つかみどり広場などがある。すぐ裏の長良川には友づくり広場があり、ここで鮎釣り体験もできるようになっている。個人向けと団体向けにそれぞれいくつかの講座があり、団体向けには川の生態調査や川遊び講座なども設けられている。

一通り見て回ってみて、郡上市の観光拠点の大きな一つとしたい、「長良川のあゆ」ブランドを売り込みたい、これからの漁業の担い手を育成したい、将来遊漁証を買ってくれる釣り師を増やしたいなど狙いはわかるものの本当にこれで運営ができていくのか心配になってきた。釣り堀体験や魚つかみ体験の場所はこれまでも郡上市内や近隣にたくさんあるし、県内外どこにでもあり特に新しい

取り組みでもない。さらに長良川には10月から翌年2月の溪流釣り解禁までの禁漁期間があるし、積雪や水温の低さを考慮すると4月頃までは体験プログラムはほぼ無理である。半年近くが施設見学だけとレストランと釣り堀程度で運営しなくてはならない。結局は夏の期間小中学校の子どもたち向けに自然体験学習といったかたちで県内の学校に授業の一環としてお願いし、やっていくのが主な事業となると思われる。

このあゆパークについてはビックリしたことがあった。新聞報道によると7月26日にアジアなど14カ国の駐日大使や公使がここを訪れたそうで、鮎の塩焼きを味わい、ニジマス釣りを楽しんだとあった。

私がこの施設を見たときには、釣り広場にイワナが入っていたが、もしこの報道が事実だとしたら「清流長良川あゆパーク」でニジマス釣り。「清流長良川の鮎」として世界農業遺産に認定されこれを謳うこの施設で北米原産のニジマス釣りはない。養殖でもしかたがないのでせめて本来長良川にいるアマゴかイワナにしてほしかった。

岐阜で生まれ60年近く長良川で釣りをし、20年以上毎週郡上に通ってきた私もこのあゆパーク運営がうまくいき長良川への関心が広がるのを願っていますが、これらのことを考えると将来的にこの施設が郡上市の財



政の負担になってしまうのではと心配になるばかりです。

それにしてもこれまでは親や身近な大人、友達などから自然に伝わってきた川遊びや釣りも学校で教えるようになっていくのですかね。(鮎パークのHP ayupark.jp)

### 今年の長良川の鮎釣りについて

今年はわがホームグラウンドの吉田川が全くダメである。毎年6月の鮎の解禁が近くなると、稚魚放流場所に近い川沿いの我が家の畑からは放流されたたくさんの鮎を見ることができる。石も鮎によって磨かれてきれいになり、鮎が放流されたことがすぐわかる。その年の鮎釣り始めは必ずすぐ下に降りて釣ることに決めていた。

ところが今年は解禁日近くになっても鮎の姿はほんの少ししか見ることができず、石が磨かれず川も汚かった。冷水病が出たとの話である。もともと本流ほど稚魚放流が多くなく堰堤がたくさんあり本流からの鮎の遡上が期待できない吉田川のような所は稚魚放流魚に冷水病が出たらその年はアウトになってしまう。

本流でも冷水病が出てオトリ屋のご主人が川を見て「(鮎が)白くなって流れていく」と言っていたそうであるが、放流量の多い本流ならそれなりに残るし天然遡上の鮎も上がってくる。私も吉田川を諦めて6月8日あゆパークを見た後、本流の高鷲地区入り口付近で釣り初めをすることにした。私が吉田川で釣り初めをしないなんて初めてである。この日は渇水の中で午後からなんとか17匹の釣果を得ることができたけれど、それから以降は全くダメ。その後6月下旬から7月上旬までの大雨があり、大增水が落ち着いたと思ったら今度は毎日が40度近い酷暑の中で、へぼに加え軟弱でもある私は竿が出せていない。7月末に美並で竿を出した釣友から、天然遡上鮎が結構見えると情報もらったので、本流での終盤はいけるかもとひそかに期待している。

(これらのことはへぼ釣り師が見聞きしたことなのでご自分の腕に自信のある方は終盤といわずどんどん長良川に来て実釣してみてください)

それにしても吉田川大好きな私が今年は全く竿を出さずに終わってしまいそうである。冷水病はほぼ毎年出ている、魚苗センターで育てられた稚鮎が放流されたらたん冷水病にかかり、稚魚の体に穴が空いて死んで澱みに溜まっているのを見るのはつらい。今後もこの状態は続くでしょう。吉田川にも鮎がどんどん遡上できるように整備し直すことはできないですかね。

岐阜県は今年3月に魚苗センターの規模を拡大した。増産することで漁獲量の回復に期待しているようだがそれだけで良いのだろうか。漁獲量の落ち込みの最大の原因は何か。「源流の吠谷から伊勢湾にまで繋がった川」としての長良川システムをもう一度考えてみる時が来ているのではないのでしょうかね。

### 天然遡上鮎

長良川の鮎は秋に岐阜市周辺で産卵し孵化した仔魚が流れに乗って海に下り、冬を過ごして成長、春に稚魚となって遡上してくる。この海から遡上してくる鮎を天然遡上鮎という。釣りは海産鮎とも呼ぶが、水産業界では沿岸海域で稚魚を捕獲して養殖したものも海産鮎と呼ぶために紛らわしい。長良川で生まれた鮎は、現在では河口堰で堰き止められて流れの無くなった下流部を海まで下ることができないので長良川漁協の方が、秋に岐阜市内の長良川で子持ち鮎を捕り、約1億粒採卵し受精させたものを河口堰横の人工河川まで運び、孵化させ仔魚が海に下ることができるようになっている。なお天然鮎というのは、この天然遡上鮎と中・上流域で放流された養殖稚鮎が成長したものを合わせて呼んでいる。

## 事務局から

今シーズンは地震から洪水、猛暑かなりの被害が出ましたね。その中で何と言っても岐阜でも豪雨があり伊勢湾台風の時と60センチしか変わらない水位だったときは私も今までにない怖さを感じました。そして先日の台風12号の進路。私たちが生きているほんの少しの間にもこれだけの気候の変化に私は気をつけていてもどうなるのかわからないことをより肌身に感じました。(中川 敦詞)

岐阜市北岸にある4つの九条の会が毎月19日朝に忠節橋北詰下の交差点で通学・通勤のみなさんに呼びかけを行っています。会の趣旨から平和について話しが主ですが私は長良川畔のこの地だからこそ知っておいてもらねばならぬ事 木曾川水連絡系導水路事業について説明と訴えもしています。この問題は時を経てひっそりと川底に身を潜めています。日本人に広がる社会への無関心と自分の頭で考えずに右にならう傾向がさらに強まったので心配しています。 樺水 (粕谷 豊樹)

熱い！熱い！！夏ですねえ・・・。私は、良く言えば辛抱強い、悪く言えば鈍感ですし貧乏育ちもあり、冬の寒さは動けば暖くなるけれど、夏の暑さはエアコンは勿論、冷たいものを食べたり飲んだりするにはお金をかけないと気持ち良く過ごせないという事が、若い頃からなぜか納得できず、季節としては、冬の方が断然好き！で来ました。しかし今年の夏は、異常な暑さと年齢的なこともありそんなことを言うてはいられない。命が危ない！へんに抵抗せず心して過ごしています。皆さんも、どうぞ無理せず夏をやり過ごしてください。 冬はすぐ来ますよ！！ (岡 久米子)

今回、洪水特集を編集しながらいろいろ考えました。

私は岐阜市の伊奈波中学に通いました。長良川の北の昔の河川敷の後に、岐阜商業高校、岐阜北高などたくさん学校がありました。当時、金華橋がまだなかったので、長良川の南側にあった金華小学校と京町小学校（今は合併して岐阜小学校）の生徒たちは忠節橋か長良橋をぐるっと回って通学していました。私の通っていた頃、今の金華橋のやや下流の四屋（よつや）から対岸まで朝夕、通学用の渡船があり、天気の良い日はそれを利用していました。大水の出た後、流れがよく変わり、河原の幅も変化しました。川は変化するのだな、と思ったものです。(田中 万寿)



私は長良中学校（現在の長良川国際会議場の位置にありました）の生徒でした。当時、服装・髪・鞆に規制がないとても自由な雰囲気の良い学校でした。その頃、先生たちは「教育正常化」とたたかってきていたようです。

向こう岸の伊奈波の子たち（私たちには都会の子に見えた）が制服・制帽・白い肩掛け鞆で統一され、わざわざ長良橋を渡り私たちの中学校の前を通り過ぎる姿は、私には不思議な光景でした。長良川市民学習会で万寿さんや岡さんから渡船通

学の話聞いたときは驚きました。渡船通学や学区割りの謎は長良川の歴史に鍵があるようです。次回のニュースで謎解きしましょうか？ 皆様の情報をお寄せください。(武藤仁)



「よみがえれ長良川」実行委員会の参加団体を紹介しています。環境保護の要としていつも積極的な活動を展開されている。「藤前干潟を守る会」さんです。

## 参加団体紹介 4

### 特定非営利活動法人 藤前干潟を守る会

理事長 亀井浩次

伊勢湾の最奥部、名古屋港の庄内川河口に「藤前干潟」があります。かつて伊勢湾の奥には広大な干潟・湿地が一面に広がっていましたが、江戸時代からの新田開発・高度成長期の工業用地造成によって多くが失われ、最後に残ったわずかな残存部分が藤前干潟です。

1984年、名古屋市のごみ埋立処分場をこの干潟上に建設する計画が立てられ、それに対して干潟の保全を訴える運動がはじまりました。私たち「藤前干潟を守る会」はその中心となり、1999年の計画中止を実現することができました。名古屋市はそれと同時に環境政策の転換をはかり、それが2010年の「生物多様性 COP10」の開催にもつながったことから、藤前干潟は「なごやの環境の原点」と呼ばれます。

藤前干潟は2002年にラムサール条約に登録され、2005年には環境省の現地施設も作られました。当会は法人格を取得して「特定非営利活動法人藤前干潟を守る会」として施設の運営を請け負い、そこを拠点に訪問者の案内や現地観察会など、干潟保全の重要性を伝え、持続可能な社会の実現をめざす活動を続けています。



## ご参加ください！

- 8月31日（金） 試写会「ほたるの川のみもりびと」 18：30～ハートフルスクエアG大研修室



参加費 500 円

- 9月9日（日） さよなら原発パレードぎふ 10：30 清水緑地公園（JR岐阜駅南）
- 9月23日（日） 長良川の河口「桑名」で話を聞く会 9：30 赤須賀漁港に集合 参加費 500 円
- 10月6日（土） 徳山ダム導水路ツアー 9：30 JR岐阜駅大型バス駐車場を出発 参加費 1,000 円

岐阜駅→徳山ダム→西平→根尾川→千鳥橋→長良川鶴飼・岐阜駅

\*夜は、鶴飼い観覧船貸し切りで交流会（参加費 5,000 円：乗船料・夕食代含む）

お問い合わせは、090-1284-1298 武藤までお願いします。

## 発行：長良川市民学習会

<http://dousui.org/>

代表：粕谷志郎

連絡先：武藤 仁 / 090-1284-1298

〒500-8211 岐阜市日野東 7-11-1

- 私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。賛同してくださる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：00840-3-158403

口座名称：長良川市民学習会